

「装い機能不全」の対処法は…

ドレスコードがわざわざ「ブラックタイ」と指定された会の楽しみのひとつは非日常感にあるだろう。近頃は「仰々しくドレスアップするなんて、いたい」とかで、日常の延長の装いで出席する人も見かけるが、やはり女っぷりのいいドレスを着て日中とはがらりと雰囲気を変えて現れる女性は、潔くてかっこいいと思う。

で、そのドレスだが。女度が上がれば上がるほどアクセシビリティが起りやすいのである。スリッパドレスの肩ひもが切れる。肩ひもなしのドレスがすり落ちる。ステイレットヒール(極細ヒール)が折れる。脇やスリットから見えては

いけない部分が見える。さらにはダンスをしたらファンデーションが殿方のタキシードに移る……。

事前のチェックは万端でも、このような「装い機能不全」(ward robe malfunction)は、思いがけない瞬間に女を襲う。

このことが脚光を浴びたのは04年のスーパーボウルでのジャネット・ジャクソンの「片胸ぼろり」事件だった。あれは確信犯的な演出のようでもあったが、明らかな偶発的事故としての「機能不全」も公の場ではしばしば起きている。興味深いのは発生の瞬間の女性の対応である。

カンヌ映画祭でのソフィー・マ

＜ 中野香織の——ココロのココロ ＞

ルソーはドレスの左肩が落ちて胸があらわになった瞬間、すばやくドレスを直して何事もなかったかのように振る舞った。ドイツのステージでドレスがすり落ちたマライア・キヤリーは、照明が暗くなつたときにドレスをおさえて舞台袖へと走り去った。リオでのファッションショーでドレスのすき間から片胸が見えてしまったナオミ・キャンベルは、コメントを求められても無言を通した。ただその後、同行していたアシスタントから暴行のことで訴えられている。緊急事態として発生する機能不全にどう対処するかで、その女性のほんとうの姿がちら見える。真の女っぷりを試されるのは、むしろこの時かもしれない。

(服飾史家)